

【追悼 後藤顕之輔氏を偲んで】



後藤顕之輔氏 (EICA 名誉会員/元 ㈱明電舎 取締役副社長) が、去る 2021 (令和 3) 年 12 月 3 日に永眠されました。享年 78 歳でした。

ここに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

2022 (令和 4) 年 5 月

環境システム計測制御学会 (EICA)

略 歴

1943 年 9 月 静岡県に生まれる
1967 年 3 月 東北大学工学部電気工学科卒業
1967 年 4 月 ㈱明電舎 入社 水処理関係の開発・営業技術などの業務に従事
1996 年 11 月 システム装置の設計部長を経て同社システム装置工場 工場長
1999 年 6 月 環境システム事業部長
2000 年 6 月 取締役
2002 年 6 月 常務取締役エネルギー事業本部長
2003 年 6 月 常務執行役員
2004 年 6 月 取締役兼専務執行役員, エンジニアリング事業本部長
2006 年 4 月 取締役副社長 国際, 人事・総務および技術全般を担当
2008 年 4 月 顧問 (明電興産 ㈱ 取締役社長)
2010 年 4 月 ㈱明電舎顧問・明電興産 ㈱ 社長を退任
2021 年 12 月 3 日 神奈川県横浜市にて逝去 (享年 78 歳)

後藤顕之輔名誉会員 (元副会長) を偲んで

㈱日立製作所 水事業部技術主管
EICA 名誉会員

早稲田 邦 夫

2021 年 10 月 27 日夕刻に、後藤様と EICA 研究発表会 (同年 10 月 29 日にオンライン開催) 参加について電話でお話しました。その時は入院療養中でしたが、明るくて力のあるお声でした。時々退院して家に居られたようですが、大事を取って入院されている期間が多いとお聞きし、今回の研究発表会への参加は難しいとのことでした。

会話する中で、EICA 評議員であることを喜んでおられたし、EICA の重鎮としてまだまだ頑張ってくださいというお願いには「ありがとう、頑張る」と言って頂きました。年明けにお電話してみようと思っていました。

今までも電話すると必ず「電話をくれてありがとう。」と嬉しそうに言って頂きました。病状は厳しいことは理解していましたが、そのうち、日進月歩の新しい治療方法が出てくることを期待していました。12 月 3 日にご逝去された訃報を受けて残念でなりません。ふと、電話で会話した時の後藤様の語りかけるような声と後藤様が書かれたエッセイ「語りかける力」(学会誌「EICA」第 22 巻第 1 号掲載)を思い出しました。

後藤様は製品・システムを我が子のように愛しておられ、若い頃の経験談に、原因不明トラブル事象が生じたときは、製品・システムに取り付けられた無数にある計測器のメーターが後藤さんに話しかけてくるので、メーター群と徹夜で語り明かして症状を聞き取り、原因究明、トラブルシューティングしてきたと書かれていました。ここに計測制御の原点を見た気がしていました。

1967年明電舎に入社されて、副社長、子会社社長を歴任され、2010年春、43年間の会社人生を終え、自分の田舎の百姓家で過ごされることも多くなったと聞いていました。野良仕事をし、野ウサギ、小鳥、カラス、トンボ、花々と語り合っておられたようです。そして、残念ながら、畑などを荒らす猪とは会話がなと書かれていました。私はそのうち後藤様のお屋敷に遊びに行くといったままでした。ご迷惑をお掛けしてきた点では猪と一緒にですが、お伺いしておけばよかったと思いました。

2002年欧州視察にご一緒したとき、おみやげに猫の置物を買っておられました。旅に出たときは必ず当地の猫の置物を買うと言っておられましたが、きっと当地の旅先の思い出を語り合っておられたのだなと思いました。会社人生終了後も今日までEICA学会活動には積極的に参加していただきました。運営幹事会、評議員会、総務・企画合同委員会にて、適切なアドバイス、提案をいただいております。

後藤様と私の最初の出会いは1993年EICA活動時とっていました。しかし、後藤様の20周年記念講演「EICA設立20周年を迎えて」の講演内容に「昭和63年（1988年）東京都下水道局からの依頼でSOFT PLAN検討会（下水道管渠の中に光ファイバーケーブルを張り巡らせ、全く新しい高度情報通信ネットワークシステムの都市インフラを構築する、10年後を見据えた検討会）の電機メーカーの技術者が環境の分野で同じ目的をもって一堂に会する初めての打合せの情景が今でも頭に浮かびます」という掲載分を見て、あのとき一緒に会議室にいたのだと分かり、世間は狭いものだと思います。

EICAで後藤様と最初の活動は1993年、第一回リレー研究会（広島市）開催準備でした。EICAは当初は任意団体であり、名称もEICA環境システム計測制御自動化研究会という名称でした。当時のEICA副会長 砂原広志教授（近畿大学（東広島））ご指導のもと、広島県、広島市、山口県新南陽市、マツダ等のご協力いただき、研究発表会は無事終了しました。懇親会の場で、当時の行事委員会の柏木委員長、後藤様達とお礼のご挨拶をしたとき、広島県の方から、「当会は真面目で立派な研究発表会ですね。感心しましたし、勉強になりました。ただ、研究会とあるから圧力団体かと少し勘違いをして

ていました。」とショッキングなお話がありました。同様な話が多く聞かれ、当時の柏木行事委員長発案により、学術団体登録を目指すことになりました。後藤様が柏木行事委員長の後継者として、1995年に企画委員長（行事委員会と調査委員会を統合）に就任されました。後藤様は企画委員会はもとより、総務委員会、編集委員会、事務局と一体となって活動し、1996年EICA環境システム計測制御自動化研究会をEICA環境システム計測制御学会へ改名、そし



平成13年総会にて

て学会の活動を大きく進展させ、1999年 EICA 環境システム計測制御学会の日本学術会議学術研究団体登録に尽力されました。2002年に副会長にご就任（2007年まで）され、2008年には多大な功績を称え、EICA 名誉会員になられ、今日まで評議員としてご活躍をしていただいております。

後藤様の生前の本学会ならびに環境システム計測制御の研究への多大なご貢献に感謝し、在りし日を偲び、お礼の意を込めて、交流の深かった皆様にご寄稿をいただきました。併せて、ご功績を偲び、ご略歴を採録いたします。

改めまして、後藤様のご遺徳を偲び、心からご冥福をお祈り申し上げます。

追伸

このたびの訃報に接し、私と当学会事務局が中心となって、後藤様と所縁の深い方々にお声掛けし、追悼文を寄稿いただきました。それぞれの皆さんと様々な関わりがあって、後藤様のいろいろなお人柄や思い出が語られております。ご一読をいただき、在りし日の後藤様を偲んでいただければ幸いです。

後藤顕之輔様、安らかに

京都大学大学院 工学研究科 教授
EICA 会長

高岡昌輝

後藤顕之輔様が令和3年12月3日に逝去されたことは、EICAの事務局から連絡をいただきました。ここ2年はコロナ禍で学会活動もオンラインばかりでお顔を合わせる機会が減っており、ご病気で療養中であったことを存じ上げておりませんでした。いつもお元気でおられた印象を持っておりませんでしたので、青天の霹靂でありました。

後藤顕之輔様はEICAの設立当時のメンバーであり、20周年において当時を振り返って書かれている原稿を読ませていただくと、EICAの前身である環境システム計測制御自動化研究会が1991年に設立されて以降、1993年から評議員となり、行事小委員会委員としてご尽力されておりました。今から約30年前であり、私は修士を修了し、助手として採用され、働き始めたのが1993年です。その後、後藤様は1995年から企画委員長を7年間お務めになり、2002年から副会長として、本会を民間企業のお立場からリードしていただきました。後藤様は（株）明電舎で一貫して、水処理における制御技術の開発を行ってこられたとお聞きしておりますが、国際規格などについても注意を払っておられ、この分野の技術を海外に発信する学会にするべく、活動されておられました。2007年には副会長を退かれ、2008年にEICA名誉会員となるとともに企画のアドバイザーとして長らくご指導をいただきました。私は2008年EICAの事務局が変わった時から、つまり、後藤様が一線を退かれてからお付き合いをすることになりましたので、あまり研究の話をする事はなかったのですが、コロナ禍になる前までは毎回のようEICAの委員会にご参加いただき、様々なご意見をいただきました。特に、創設期からの話（私の恩師である平岡正勝先生の話など）、民間企



第25回EICA研究発表会（仙台）見学会にて

業等の役割、副社長としての会社の経営なども踏まえた含蓄のある話をしていただき、EICA の運営にありがたいご意見を頂戴するとともに、あたたかく見守っていただきました。本当に欠かせない方でありました。

環境システム計測制御技術に関しては、過去から何度となく様々なブームが来ていたと認識していますが、今後はコンピュータ及びインターネット技術の向上から明らかにこれまでと違った次元に発展していくように思えます。このような時代であるからこそ、過去からの経験と知見の話をまだまだお聞きしたかったと思います。

これからも大所高所から様々なご意見を頂戴し、見守っていただけると信じておりましたが、本当に残念で仕方ありません。今は安らかにお眠りください。

心から後藤顕之輔様のご冥福をお祈り申し上げます。

後藤さんを偲んで

EICA 名誉会員 古里明瑠

昨師走の初めに、EICA を通じて、後藤さんご逝去との知らせをお聞きし、唯々呆然としたことを思い出しています。その後、奥様に弔意のお手紙を差し上げ、お返事も頂戴したのですが、未だに信じられない想いでいます。

今から 40 年ぐらい前だったのでしょうか、小生が水処理会社の現役の時分に、下水処理場の受変電設備の取引があり、当時明電舎の設計責任者であった後藤さんにお会いしたのが最初だったと思います。その後は、業界が違うこともあって、あまりお付き合いがなかったのですが、EICA の創立に絡んで、平成元年ごろから、後藤さんが行事委員長、小生が総務委員長を仰せつかったことから、公私共にお付き合いが深まり、EICA をきちんとした学会にしようと、民の立場から、お互いに汗を流してきました。立場の違いから、激論を戦わせたことも、多々あったのですが、小生が少し年長だったこともあり、あの人懐っこい笑顔で、「せんばい、マーこの辺で手を打とうよ」と、纏めてしまう懐の深い人徳をお持ちでした。

平成 11 年、リーマンショック不況の際に、後藤さんは明電舎の沼津工場長をされていて、立場上、工場職員の人員整理をしなくてはならず、随分悩んでおられて、「ことが終われば、責任を取って、自分も退職する。」と言っておいででしたので、その 10 年ほど前のなべ底不況で、公共事業予算が一律



エギュードミディ (3840 m) からモンブランを望む (1997 年)



平成 28 年度 EICA 総会懇親会にて

削減されて、同じようなつらい経験をしていたことから、「退職することは、辞めさせられた人たちの犠牲を無にすることになる。残って事業を盛り返すことこそが、貴兄に課された使命だろう。」と懸命に引き留めたことが思い出されます。その後のご活躍は、目覚ましいもので、副社長までのほり詰められて、十二分に使命を果たされたことは、皆様ご承知の通りです。

そういえば、初めて取締役役に昇任される前に、『社長から、「個人的不祥事があると、役員に推薦出来なくなるから気を付けるように」と言われたので、このところ通勤電車では、鞆を胸の上に抱えて乗っているんだ。』と話されていた笑顔が、つい昨日のこのように思い出されます。

EICAの海外研発(IWA・ICAワークショップ)はじめ、国内研究発表会や行事でも、ご一緒したことが多く、たまには、お互いに、そんなうまくはないゴルフも楽しんだりして、本当に良き仲間として、公私ともに長いお付き合いでした。自分の地位や立場が変わっても、気さくで誰とも分け隔てなく、交流して頂いたご人徳は、EICAにとっても宝物だったのだと、今更ながら思い返しています。

人生会者定離が定めとはいえ、こんな得難い仲間が、幽冥界を異にされるのは、虚しくて誠に無念でなりません。

「ゴトケンさん、寂しいナー、嗚呼!」

心からご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

後藤顕之輔さんとの出会いとお別れ

京都大学大学院 工学研究科附属
流域圏総合環境質研究センター 教授
前 EICA 会長

清水 芳久

突然、そして突然でした。

今から十数年前のある日、後藤顕之輔さんが大学の研究室にやって来られた。EICAの方々のご挨拶に来られるということは、当時の事務局をやっておられた波能さんから事前に電話で連絡があったのでびっくりすることはなかったのですが、どのような方々が来られるのかは全く予想することができずにお待ちしていました。これがEICAの企画委員長として活躍しておられた明電舎の後藤さんとの初めての出会いでした。

この少し前にEICAの事務局長をお引き受けしてしまった当時の私は（断ることができなかったというのが正直なところですが）実はこの学会の活動内容はもとより、学会の名称すら知りませんでした。後藤さんをはじめとして、数名の方々と名刺交換をして、その後、研究室で数時間のお話をさせて頂きました。随分と丁寧な学会なんだなと思うと同時に、どこか爽やかな風が吹いていったことを記憶しています。後藤さんのあの人懐っこい笑顔のせいだったのでしょいか。後藤さんは研究室を出て行かれる間に一言、「波能さんのことをくれぐれもお願いします」と言われたことを今でも覚えています。「わかりました」と答えました。この数年後に波能さんはEICAの事務局の役目を無事に終えられ、その経験を生かして次のお仕事を見つけられました。後藤さんとの約束は何とか果たせたと思いまし



平成18年度EICA総会懇親会にて

た。

同じ年の4月にEICA合同委員会に事務局長として初めて出席しました。企画委員長として議長を務めておられた後藤さんは、その年の秋の研究発表会での発表論文数を確保するために、「A社〇件、B社△件、…Z社□件、お願いします。以上」とあのお声で、皆さんに有無を言わず決定されました（豪腕でした）。私にとっては新鮮な経験でした。そして委員会後にまたあの笑顔で「これも必要です」とポツリと言われました。最近では名誉会員になられてからも合同委員会にほぼ毎回参加してもらって、「ここぞ」と言う時のご後藤さんの発言（一括）にいつも助けられていました。

数年前に体調を崩されてからは直接にお顔を拝見することは叶いませんでしたが、電話で何度かお話しをさせて頂きました。その度ごとに元気そうなお声で、とてもご病気とは思えませんでした。「元気になるまでまたEICAに出席します」といつも言ってもらえました。でも突然にいなくなってしまう残念ながらお会いすると言う約束は叶いませんでしたが、あの後藤さんの笑顔はいつもそしてずっと私の心の中にあります。

合掌

後藤さんと明電時報

滋賀県立大学 環境科学部 教授
EICA 編集アドバイザー

井手慎司

この追悼文を書くにあたって、研究室の本棚の中から探しだした一冊の雑誌がある。「明電時報」という、明電舎やそのグループ企業の研究開発や技術、製品等を紹介するために刊行されている技術論文誌の1990年発行の5・6月号（通巻212号）である。「水処理特集」と題されたその冊子を何十年ぶりに開き、目次のページを見たとき、その一番上に記されていた特集編集責任者の名前に目が釘付けになった。何かの参考になればと軽い気持ちで手にとった明電時報であったが、そのときになってようやく、この号の編集責任者が後藤顕之輔さんであったことを思い出したのだった。

特集号は「Computer Control Systems for Wastewater Treatment Plants」というJohn F. Andrews先生が寄稿した巻頭言で始まっている。先生は米国ライス大学での私の恩師にあたり、当時、明電舎の大崎の総合研究所に勤めていた私が、後藤さんの指示で依頼して執筆していただいたものである。日本語訳も私が担当した。この号の発行の翌月にはIAWPRC（IWAの前身にあたるInternational Association on Water Pollution Research and Control）のICA（Instrumentation, Control and Auto-



平成16年度 EICA 総会懇親会にて



第19回 EICA 研究発表会懇親会にて

mation) ワークショップと本会議が横浜と京都でそれぞれ開催されることになっており、先生の巻頭言の最後もこれらの会議の告知で結ばれている。この号が「水処理特集」となったのもそれが理由であったよう思う。

しかし、この号が発行されたときには誰も予想していなかったのではないだろうか。このときのICAワークショップがきっかけとなり、翌年に後藤さんらによって本学会 EICA が設立されている。ちなみに私自身も、半年後（その年の12月）には明電舎を離れて滋賀県の国際湖沼環境委員会で働き始めることになる。そして、約二十年後の EICA の学会誌第16巻 第1号に Andrews 先生の、そして今回はまた、後藤さんの追悼文を書かなければならなくなるとは……。

特集号に載っていた後藤さんの所属は技術総本部技術本部である。確か当時の技術本部（少なくとも水処理部門）は、私が勤めていた総合研究所から少し歩いた五反田にあったよう思う。後藤さんと最初に会ったのもその五反田の事務所だった。第一印象としては親分肌で、当時の役職は思い出せないが、技術本部の主（ぬし）のような人だと思った記憶がある。その後、EICA の活動で再びご一緒することになるが、私にとって（また本学会にとっても）後藤さんは、頼りになる、しかし、だからいつまでたっても頭が上がらない、かつての上司といった存在であり続けたよう思える。

特集号に話を戻すと、私が専門としていた水処理分野の特集であっただけに、後藤さん以外にも掲載論文の執筆者の中に、明電舎で働いていたときにお世話になったたくさんの方々の懐かしいお名前を筆者写真付きで見つけることができた。しかし、それらの中には、この2月に訃報に接した小須田徹夫さんのお名前もあった。小須田さんや後藤さん以外にも、すでに故人になられた方が何名もおられた——年齢的にまだまだこれからという方々ばかりである。

寂しいかぎりではあるが、あの後藤さんのことである。いまごろは天国で明電舎のOBのみなさんらと新しい学会でも立ち上げられているのではないだろうか。謹んで、ご冥福をお祈りしたい。

後藤様を偲んで

メタウォーター(株)
EICA 幹事長

田子靖章

後藤様と初めてお付き合いさせていただいたのは15年ほど前に遡ります。2006年にEICAの人材育成プログラム/セミナーである、「未来プロジェクト」の2期生として初めてEICAに関わったときにお話ししたことがきっかけでした。

未来プロジェクトは2005年に当時の事務局長であった清水先生と副総務委員長であった福嶋様が発起人となり立ち上げた人材育成プログラムです。産官学の技術者・研究者が集まる学会において、若手技術者に情報交換や人脈形成の場を提供し、世代を超えた多次元ネットワークづくりに役立てたいという思いから生まれたものでした。当時の後藤様はEICA副会長、(株)明電興産の社長で多忙極まるお立場であったにも関わらず、未来プロジェクトのセミナーに何度かお越しいただき、懇親会にもご参加いただきました。

当時の私はEICAの活動を良く理解していませんでしたが、学会設立までのお話しや、計測・自動制御の最新技術の社会実装にあたって、学会や産官学で何が話し合われ、どのように合意形成していったのかなど、興味深いお話をお聞かせいただきました。後藤様は研究分野の細分化などにより、若手技術者・研究者が意見交換する場や機会が少なくなっていることを憂いており、「若手には様々な

ことに挑戦して欲しい、学会をどんどん活用して欲しい」と和やかな口調ではありましたが熱心に語られ、企業を超えたつながりが乏しかった当時の私は大きな感銘を受けました。懇親会では私のような若手とも気さくに会話していただきました。

副会長を退任されたあとは名誉会員となり、学会運営の企画アドバイザーとして就任されました。私は未来プロジェクトをきっかけに、学会の企画委員



未来プロジェクトⅡ第1回セミナーにて（2006年11月）

として深く関わらせていただいたこともあり、企画委員の仕事に対して度々助言やご指導をいただきました。当時の私は未来プロジェクトの運営を始めて任され、挑戦の連続でネットワークづくりや継続の難しさを感じてプロジェクトの方向性など地に足の着いていない発言が多かったと思いますが、後藤様は常に挑戦を認めて下さり、穏やかに暖かく見守っていただきました。この場をお借りして後藤様のご厚情を心より感謝いたします。

2019年7月、メタウォーターの高見澤氏のご逝去され、8月の弔問の際に後藤様より香典の依頼があり、その際に急性白血病で入院されたという話をお聞きして大変驚きました。

当時 EICA は設立 30 周年に向けた特別行事として 30 周年記念誌の編集を進めており、設立当初から深いかわりがあった後藤様抜きでは語れないということもあり、申し訳ないという思いで打診させていただきましたが、療養中にも関わらずご了承、執筆いただきました。

届いた原稿は手書で大変心が籠ったものでした。EICA は計測・制御・自動化の技術を得意とする学会であり現在は IT 化の時代ですが、後藤様ご自身はアナログ的な考えで仕事をしてきたとのことで、特に環境問題や上水道の水質を考えると、また下水道の流域に生活する人のことを考える時も、人の温もりを意識するには「アナログ思考」が必要であるとのことでした。IT の流れはビッグデータを駆使するだけの無味乾燥した技術が跋扈する時代かもしれないが、EICA は「人の絆を大切に作る組織」であり、有効に機能して環境問題を解決してくれるはずだ、EICA にはそれを牽引する力があると思いますと書かれていました。また、未来プロジェクトについても取り上げていただき、若い人への技術の伝承と、人と人の絆を育んできたことは大きな前進であるとコメントをいただきました。

後藤様の「人の絆を大切に作る」という思いを私たちの世代が受け継いで、また次の世代に渡さなければならないと、静かに、強く思います。これまで本当に有難う御座いました。

後藤様のご冥福とご家族様のご多幸をお祈りして追悼させていただきます。

後藤顕之輔さんを偲んで

EICA 名誉会員 福嶋良助

後ろから「ヨッ!」と声をかけて肩をたたいて頂いていた後藤さんが今でも思い出されます。訃報を受けた時も信じられなくて今にも同じ声掛けをされそうに思いました。私にとって後藤様は会社が違っていても学会活動の中でよき先輩でした。頼りになる方でした。

後藤様は EICA の創成期から学会運営の中心で働いておられ、若くして企画委員長・幹事長を務められてきました。2002年松井先生が会長に就任されると同時に企業在籍者として初めて副会長を受けていただけてきました。それ以降20年にわたり本学会のご意見番の立場でアドバイスを頂き、総会や研究発表会に必ず足を運んで頂きました。勿論本業としても(株)明電舎の副社長まで務められて活躍されていたことは申すまでもありません。

私が EICA という学会の存在も知らずに会社の先輩からこの学会に入るように指示を受け、同じ学会活動を行うならば学会の中枢の方々には顔を覚えていただき、勉強させてもらうように指示されました。平岡先生や松井先生等の会長から各委員会の委員長と交流させていただきました。その中で一見強面の方が後藤さんでした。お付き合いをさせていただくと厳しい中にもユーモアがあり親分肌の雰囲気が伝わってきました。約25年前の事です。

以降学会長が平岡先生から松井先生、田中先生、清水先生と交替される際も何かとご尽力されたようです。後藤さんがこの学会で最も思いをかけてこられたことは、賛助会員企業を中心に民間企業がサポートすることでした。学会の構成は学識の大学と業界の実践の場を提供する全国の自治体、および産業としてサポートする民間企業の3団体です。特にこの業界は社会のインフラの維持・伸長が要望される公共事業が主体の場になっています。民間企業の活力が大いに求められていました。企業の研究職会員の活躍できる場として学会の研究発表会の活用を図ることが学会のコンセプトになっています。賛助会員企業を積極的に勧誘し、その企業の方々に個人会員としてお誘いすることでした。後藤さんの学会への思いはこの民間企業が支える学会という自負があったように感じます。

EICA の関与する業界も必ずしも好調の時とは限りません。学会を支援する賛助会員企業による支援が難しい時期があり、総会や研究発表会の運営も厳しいときもありました。このような状況下で後藤氏はかなり強制的な支援を賛助会員企業に依頼され、急場を凌いだ時期もありました。全体を俯瞰して指示や提案をいただいたものです。現在では歴代会長は京都大学の先生に引き継いで頂き、各自自治体の協力も頂き、民間企業の支援の基、本学会は産官学連携を構築し現在も継続してきています。これは正しく学会創成期思いであり、後藤顕之輔氏の思いが実現されているものと思います。改めてお礼を言います。

有難うございました。



第29回 EICA 研究発表会 (金沢) にて

後藤顕之輔さんの笑顔に支えられて

EICA 事務局 西尾好未

はじめに、後藤顕之輔さんのご冥福を心よりお祈り申し上げ、ご家族様のお悲しみが少しでも温かい思い出に代わっていかれることを願っております。

私が EICA の事務局に就いたのが平成 24 (2012) 年 4 月のことです。その 5 月に開催された学会の総会が実質私のデビュー戦のようなもので、とても緊張して当日を迎えたのを覚えています。皆様のお支えもあり、無事総会が終了し、懇親会へと場が移りました。当時の総会の懇親会会場は EICA の皆様には馴染みの深いレストランで、事務局による会場誘導も必要なく、何なら、新参者の私を誘導していただくような雰囲気でした。その会場で、私の大学時代の恩師、EICA でも編集委員長などを務められた井手慎司先生が以前に (株)明電舎に勤められていたこともあり、井手先生の会社員時代をご存じの (株)明電舎の皆様を、井手先生にご紹介いただきました。その中のお一人に後藤さんがいらっしゃって、それが初めての出会いとなりました。

当時の学会には後藤さんが後藤顕之輔さんを含め 3 名の役員の方がいらっしゃって、しばらくしてご本人の了解を得て、ファーストネームの「顕之輔さん」と呼ばせていただいております。

顕之輔さんはいつも事務局を、そしてそこであたふたしている私を気にかけてくださり、笑顔で「大丈夫?」と声をかけてくださり、総会や研究発表会など行事ごとになると、どうしても席を外せない私のために、「食事はちゃんととった方がいいよ」とそっと軽食を差し入れてくださるような、とても温かい方でした。今でも思い出すとその笑顔と優しさが懐かしくて涙が出てきます。

ご病気が分かってからも、時折お電話をいただいたり、私からお手紙を差し上げたりするなど変わらず交流があり、お辛い時は「ちょっと辛いんだよね」と、お元気になられたり、食事が美味しく感じられたりすると、「今日は気分がよくて、ご飯も美味しかったんだよ」と気取らない正直なお気持ちを伝えてくださっていました。そして奥様やご家族の皆様へいつも感謝の気持ちを私にもお話しただいております。その度に本当に素敵なお方だな、と心から思っていました。

きっと顕之輔さんのことですから、今でも私のこともそっと見守ってくださっていることと思います。そう信じて、これからも恥ずかしくない生き方をしていきたいと思っております。顕之輔さんの笑顔に支えられた EICA での時間、本当に幸せでした。本当にありがとうございました。 合掌



早朝の燕栗沼にて (2013 年見学会)



総会会場にて (2015 年)

後藤顕之輔さんを偲んで

元東京都庁
EICA 名誉会員

中里卓治

後藤さんと最初にお会いしたのは、2005年のころに当時の明電舎本社が千代田区日本橋箱崎町のリバーサイドビルにあったとき、取締役専務であった後藤さんにビルを案内していただいた時のことでした。リバーサイドビルの見学は後藤さんの部下の小須田徹夫さんの紹介でしたが、当時役員をされていた後藤さんにていねいにご案内していただき、たいへん恐縮したことを覚えています。リバーサイドビルは最新式のオフィスを配置した高層ビルでした。近くにIBM箱崎ビルがあり、当時の最先端のオフィスオートメーションを目のあたりにして、ただただ驚くばかりでした。東京都下水道局と明電舎との付き合いは長く、日本初の下水処理場である三河島汚水処分場に大型電動機を納入して以来の約100年にわたりますが、誠実で責任感の強い社風は後藤さんと二重写しになり、視察の後、この方が公共部門を率いているのだな、という感想を持ちました。

EICAでは、後藤さんは早い時期から関わっていて、EICAの創設、発展に貢献されました。私は、当時EICA会長をされていた田中宏明先生の推薦で2006年にEICA編集委員会に参加させていただきましたが、後藤さんは副会長の要職に就いてEICAを運営されていました。2007年に私が編集委員会から副会長に移ったときは、1年間ほど後藤さんとご一緒させていただき、後藤さんは2008年に日立製作所の早稲田邦夫さんにバトンタッチされました。

後藤さんのすごさをお近くで受け止めたのは2008年から2009年にかけて、リーマンショックの影響でEICAの賛助会員や個人会員が減少した時のことでした。当然のことながら会員減とともに、この時期にEICAの財政事情はかなり悪化しました。その変化に対応しきれずに事務局が従前の考えで予算案を合同委員会に提案したとき、後藤さんは厳しくかつ分かりやすく問題点を指摘されて強く緊縮予算を提案されました。同時に、当時の総会や研究発表会でも、賛助会員企業からの参加者については可能な限り増やすように指示されてEICAの財政を支えていらっしゃったことを昨日のこのように覚えています。後藤さんの企業経営者としての手腕の一端を垣間見させていただきました。

2010年の総会では、写真のように後藤さんはEICA名誉会員として「EICA設立20周年を迎えて」という記念講演をされました。このときは、EICA設立時のご苦労やこれからの展望についてユーモアを交えて語られましたが、講演後に後藤さんのご家族が会場で聴講されていたことを知りました。おそらく、後藤さんにとっては、記念講演会は大学教授の退職最終講義に相当するお気持ちであったものと察すると、講演の意味がますます深く感じられました。



平成22年EICA総会 記念講演

後藤さんは、普段は温厚で笑顔の似合う紳士で、EICA 事務局や委員のみなさんから慕われていました。そして、ここぞというときは信念に基いてしっかりと役割を果たす、サムライのような方でした。まだまだやり残したことがあるのではないかと思うと残念でなりません。

後藤顕之助さんのご冥福を心よりお祈り申し上げます。

後藤名誉会員（明電舎元副社長）との出会いと思い出

（株）明電舎 水インフラ営業・技術本部 横井 学

昨年の師走、EICA 事務局の西尾様より名誉会員であり弊社元副社長の後藤氏をご逝去されたとの連絡を受けたときは、驚きと悲嘆の極みでした。以前より病気療養中と伺い、一日でも早く退院されますようご快復をお祈りする中、突然のことで大変残念でなりません。

今、改めて後藤氏を振り返ると公私共々ご指導を受けるばかりで、少しもお返しができなかったことが大変悔やまれます（以下敬称略）。

後藤さんとの出会いは、私が1991年に静岡県沼津の工場勤務から東京へ異動となった頃でした。後藤さんは配属された職場の上司で、着任したばかりで緊張気味の私に、いつも熱心に笑顔で仕事や技術などの指導をしていただきました。しばらくして、突然、席に呼ばれ「今度、学会を立ち上げるけど最低でも500人以上の会員を集めなければいけない。」と嬉しそうに話されていたことは今でも懐かく鮮明に覚えています。何故、500人以上必要かを尋ねると、日本学術会議の学術研究団体に登録し、権威ある学会にしたいとの思いでした。その時設立された学会が、昨年30周年を迎えたEICAで、後藤さんの「あゆみ」でもあるように思われます。

仕事では、帰り際によく飲み誘われ、酒の席でいきなり割りばし袋を開いて、東京都の5か所の下水処理場の名前を書き、「これを光ファイバーで結ぶから明日、会議に出席しろ」と言われ、何も知らずに出席したこと（現SOFT PLAN）や、下水道光ファイバーを利用して、「三河島処理場の桜を世界都市博覧会の会場で大型ビジョンを使って投影するからITVシステムを手配しろ」と言われ対応し、のちに博覧会が中止となり沢山の残品を出し、二人で叱られたことも懐かしく思います。また国際的にも人脈が広く、「明日、韓国企業の友人に水質計器を販売するから韓国語で仕様書を書け」と言われたときは、頭が真っ白になり翻訳のために社内を走り回った記憶があります。そして後藤さんとの最後の仕事は、上水道の維持管理事業の立上げでした。水道事業の民間委託が始まる流れをいち早く捉えられ、その資料収集には大変苦労しました。

仕事以外では、職場の親睦会で伊豆大島へ一泊二日で旅行に行った時のことが印象深く、後藤さんが、強烈な香りがする「くさやの干物」を美味しく食べていたことが思い出されます。私も勧められましたが、口元に近づけられず吟味できなかつたことが今でも残念に思います。

弊社を退職された後は、EICAの総会や研究発表会などでお会いするほか近況では、横浜や静岡の実家でお茶畑の管理をしながら元気に過ごされて



部下の結婚式にて（後列右から三人目がご本人）

いと伺っていました。

技術者としては、弊社の水処理技術の発展に大きな功績を残されました。動力制御設備が半導体技術の進展で小型・高性能化する中、可変速装置の開発や水処理制御の高度化に向けた制御装置のデジタル化や水質センサーなど製品開発に尽力されました。また電気 (E)、計装 (I)、計算機 (C) の管理を統合する中・大規模向けの監視制御システムとして、EIC 統合化システムの開発にも取り組まれています。

思い起こせば、弊社の水処理技術の基礎を築き発展させた第一人者で、我々後輩の良き指導者であり、また良き助言者でもあり、今でも深く感謝しています。

最後に本企画に快く賛同して頂いた清水会長はじめ会員の皆様におかれましては、コロナ禍のため対面でのお礼もできず誌面での挨拶となったこととお詫びいたします。

今後も「環境システム計測制御学会」の発展とともに今回ご執筆頂いた会員の皆様のご健勝とご活躍を弊社一同お祈り申し上げます。

ありがとうございました。心からご冥福をお祈りしたいと思います。

合掌